

議 事 録 [令和 6 年度 外部評価委員会]			
日 時	令和 7 年 3 月 19 日(水) 13:00～15:00		
場 所	26 号館 Challenge Lab および Zoom ミーティング(ハイフレックス開催)	進行	谷 正史
外部評価委員 (敬称略) ※五十音順	小松川 浩(公立千歳科学技術大学 教授)(※Zoom オンライン参加) 酒元 一幸(北菱電興株式会社 取締役 CLO 企画本部 企画室 室長) 藤崎 勝治(石川県立工業高等学校 副校長)(※Zoom オンライン参加) 安江 一智(金沢市都市政策局 担当次長(兼・地域力再生課 課長))(※Zoom オンライン参加) 横越 亜紀(株式会社北國フィナンシャルホールディングス 常務執行役員 人材開発部長)		
学内参加者 (敬称略)	大澤 敏、山口 敦史、廣瀬 康夫、青木 隆、高野 則之、出原 立子、下川 雄一、 露本 伊佐男、大矢 寿美子、徳永 光晴、佐藤 進、武市 祥司、宮里 心一、山本 知仁、 谷 正史、新井 真二、鈴木 節純		
欠席者(敬称略)	山岸 邦彰、伊丸岡 俊秀、鈴木 亮一、河合 儀昌		
次 第	<u>1. 開催挨拶</u> 学長 大澤 敏 <u>2. 全体説明</u> 社会実装型教育研究プロジェクトを实践する情報に強い高度専門人材の育成 学長 大澤 敏 <u>3. 入試とKIT 入学教育について</u> 副学長・入試部長 修学基礎教育課程・教授 青木 隆 <u>4. カリキュラム改革(2023)の成果 および さらなる改革</u> 副学長・教務部長 電気電子工学科・教授 山口 敦史 <u>5. 金沢工業大学における教育 DX の取組について</u> DX推進委員長 情報工学科・教授 山本 知仁 <u>6. 取組み評価について</u> 外部評価委員からの質疑応答および意見交換 <u>7. 本日の委員会を振り返って(統括)</u> 学長 大澤 敏		
資 料	【資料1】 社会実装型教育研究プロジェクトを实践する情報に強い高度専門人材の育成 【資料2】 入試とKIT 入学教育について 【資料3】 カリキュラム改革(2023)の成果 および さらなる改革 【資料4】 金沢工業大学における教育 DX の取組について		

外部評価委員会の開催に先立ち、谷事務局長より、本委員会の趣旨が説明された。本学が定める「内部質保証に関する基本方針」に基づき、「本学の理念、建学の精神および使命・目的の実現に向け、教育研究上の目的ならびに 3 つの方針(ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーおよびアドミッションポリシー)を踏まえた教育研究活動等の適切性にかかる点検・評価を実施する」にあたり、本委員会は学外有識者から直接意見をいただく貴重な機会であり、それらの意見を基に本学の充実発展を推進させていくための、最も重要な会議体の一つとして位置付けられている旨が説明された。

次に、外部評価委員の紹介ならびに本学側の出席者として学長、副学長、学部長、学長補佐をはじめ、学長方針に基づいて方向性を具体化している教学組織を司る教職員が紹介された。

学長方針の下で現在取り組んでいる教育改革についてご説明し、ご意見をいただきたい旨が説明された。

1. 開催挨拶 (大澤 敏 学長)

はじめに大澤学長より、ご参加いただいた外部評価委員に対し感謝の意が述べられた。本委員会は、大学全体の PDCA サイクルをどのように機能させるかという大学の質保証および向上を図るための大きな位置づけとなっている。さらなる改善と発展のため、忌憚のないご意見をいただきたいと述べられた。

2. 全体説明 (大澤 敏 学長)

令和 7 年度学部学科改組の概要および本学の取り組み全体像について、【資料1】に基づき、大澤学長より以下の通り説明がなされた。

令和 7 年度学部学科改組の概要について

- ・本学では多数あるプロジェクトにおいて、知識を知恵に転換できる能力を身につける教育を実践している。これらのプロジェクトを行っていくうえで、社会課題の解決には技術者だけではなく文系志向の考え方など様々な分野を取り入れていく必要があるとの考えから、このたび大きく枠組みを変えることにした。文系・理系の枠を超えて、社会で知識や技術を活用することに視点を置いた社会実装型総合大学へ変わることを表号して令和7年度から学部学科を改組する。
- ・この学部学科改組では、「プロジェクト」教育研究を実践する中で、昨今の時代の変化から「情報に強い」を取り入れ、また協同してイノベーションを起こすための専門性を兼ね備えた「専門人材」を育成することを目的に、この 3 点に注力して大学改革を行う。
- ・学部学科を改組するうえで、教育目標を「自ら考え行動する技術者の育成」から「自ら考え行動する創造的探究・実践人材の育成」に改正する。本学の建学綱領に掲げる「高邁な人間形成」、「深遠な技術革新」、「雄大な産学協同」の理念に基づき、ディプロマポリシーに定める 3 つ能力との整合性をとった新たな教育目標を掲げて、人間形成における主体性となる「自ら考え行動する」を堅持しつつ、学修者本位の教育を実践していく。
- ・情報系 3 学部として情報デザイン学部、メディア情報学部、情報理工学部を再編した。そのうち情報デザイン学部、メディア情報学部は文理探究型学部として入試改革も行い、文系志向の学生との共創を図っていく。基幹 3 学部であるバイオ・化学部、工学部、建築学部も改編し、専門分野に情報技術を取り入れた教育を実践していく。
- ・金沢近郊の地域全体をキャンパスと捉え、DX、GX を実践しながら SX な未来を創成するうえで、あらゆる分野との連

携教育研究が可能となる 6 学部体制を構築する。

- ・その教育研究拠点としてクロスデザインラボを建設予定である。このラボでは、全ての学部の学生が未来の社会を体感し、現実とその技術を探究・実装する拠点として、既存のチャレンジラボ(分野横断型プロジェクトの拠点)、デザインアートラボ(図書館内に併設された新発想の拠点)ともあわせて構想中である。

本学の取り組みの全体像について

- ・本学がカリキュラムの支柱に置き長年培ってきたプロジェクトデザイン教育の特長は変わることなく、さらに AI・データサイエンス・IoT を活用することで深化させていく。
- ・文部科学省の「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度」において、リテラシーレベル、リテラシーレベルプラスならびに応用基礎レベルに認定されている「KIT 数理データサイエンス教育プログラム」を全学で運用し、必修科目により能力の向上を図っている。文系志向の学生にも対応できるよう既に数理・データサイエンス・AI 教育課程においてカリキュラム検討が対応済みである。
- ・情報技術の活用では、アイデアを各種の 3D プリンター等を用いて現実空間の中で形にする能力を身につけることや、学生が就業を通じて実社会の問題発見解決に挑む「KIT コーオプ教育プログラム」を変わらず推進している。

3. 入試と KIT 入学教育について (青木 隆 入試部長)

18 歳人口の減少に伴い、本学を含め日本中の大学がシフトチェンジの時期にある中での、本学の入試と KIT 入学教育の取り組みについて、【資料2】に基づき、青木入試部長より以下の通り説明がなされた。

入学試験について

- ・入学試験における推薦系と一般試験系の募集割合について、従来までは一般試験系の募集割合の方が多い入学試験を実施してきたが、2025 年度入学生から初めて推薦系の募集割合を 50%以上とする入学試験を実施した。
- ・実際の入学状況では、シフトチェンジが 2 度起こっている。1 度目は 2021 年に、推薦系入試による入学生の割合が初めて 50%を超えた。2 度目は 2023 年に、割合の数字の上では差が無いように見えるが、高校生活をコロナ禍で過ごしたのに加えて、合格点数が低下した。3 度目のシフトチェンジとして 2025 年は推薦系入試による入学生の割合が増加すると予想している。
- ・新入生に行っているアンケート調査では、「大学を選ぶ時に重視した項目」の当然1位は「学びたい学科」であり、この他「就職」「学習サポート」の項目が前年度よりも割合が増えている。しかしながら、1 位の「学びたい学科」は 21.3%であり、約 80%の学生は学びたい学科があったわけではないという結果であり、何を目的に入学しているのかという状況をふまえて入学前および入学後の 1 年目の教育に携わらなければならないと感じている。

KIT 入学教育の狙い

- ・各大学で取り組まれている高大接続は、本学に限らず、その一番の狙いとしては、学生募集や歩留まり対策のための授業提供等が行われてきたように思われる。本学では、大学での学びから社会での活躍を見通した設計にすべきではないか、また、特に入学後の 1 年間の学びに繋がっていなければならない、との議論を経て、カリキュラムポリシーのために必要となる学修態度の獲得を目的に、学生の成長に視点を当てた「KIT 入学教育」を 2019 年度より段階的にスタートさせてきた。

- ・多様な学生への支援として、一般試験系の学生には学修へのモチベーション向上を後押しし、推薦試験系の学生にはモチベーションは高いことから、学修環境を活用した習慣の定着を後押しする。学修歴や理解度よりも学びへの耐性や意欲をどう喚起していくかが重要である。入学前に、自己の認識(自己の良い所)・社会の認識(社会では何が求められているのか)を一度考えた経験を持つことで、学ぶ必要性への気づきが起こり、本学のカリキュラムが理解できて成長していくのではないかと考えている。また、高校の段階で先取り履修をし単位を取得することで、1 年次での学びに余裕が持て、学びへの耐性や意欲を喚起していけたらと考えている。

今年の具体的な取り組み内容および評価について

- ・入学教育と初年次教育が結びつかなければ意味がないとの考えから、連携強化の取り組みを行っている。
- ・キャリアデザイン講座(学び方を知るーロールモデルを探そうー)では、学科先輩学生および入学後にクラスメイトになるであろう生徒でグループ討議などを Web 上で実施した。今年は入学後に、1年次必修科目である「修学基礎 A」で同じように学科先輩との座談会を、「修学基礎 B」では学科教員・先輩との研究室調査を行い、入学前に自分で調べた内容を、今度は学科先輩学生およびクラスメイトと対面で一緒になって活動していくことを計画している。
- ・課外活動への参加と成績には良い結果が得られていることから、プロジェクトや研究室活動への参加を1 年次から促していきたいと考えており、課外活動紹介ウィークを計画している。
- ・本学では、各教育支援センターのサポートが充実している。しかしながらシフトチェンジ後、学生は不得意だと思ながらもセンターに足を運ばなくなってしまった。Web 上で講座等を用意しても参加しない。このことから、入学教育では「ゼロからの数学スタートナビ」の中で先輩学生との勉強会を実施し、その中で、入学後は学生ステーションにおいて同じように分からないことを気軽に質問できたり、一緒に学び合える場があることを伝え促す流れの必要性を感じている。
- ・入学教育で実施する取り組みの評価の中で、「先輩との座談会」が「役立った」との回答が一番多かった。「先輩との座談会」では、なぜ大学に進学するのか、大学で何を学びたいのか、その場では答えを出せなくても良いから一度考えてみようという会話が行われている。キャリアデザインをどう描いていくかは、高校においても盛んに取り組まれているかと思うが、どの段階で実施することが大事なのかだと思われる。大学へ踏み出そうとしたこの瞬間に、なぜ大学に入るのかを問われた時に戸惑う人が多いのだと思われる。
- ・オープンキャンパス等では夢・憧れや目標を示すのに対し、入学教育では「なぜ学ぶのか」「大学での学び方」について理解し、具現化するための努力の方法を示すことが役割であると考えている。

4. カリキュラム改革(2023)の成果 および さらなる改革 (山口 敦史 教務部長)

カリキュラム改革(2023)の成果およびさらなる改革について、【資料3】に基づき、山口教務部長より以下の通り説明がなされた。

- ・カリキュラム改革(2023)において卒業要件・科目構成など大枠を改訂し、2023 年度入学生が現在 3 年次生となり、この間の成果と課題を検証した。
- ・理解力の低い学生への対応では、DX を活用した学修データ分析により、1 年次前学期の合格率の低い科目いわゆる「難関科目」で不合格になるとそのまま修学に躓いてしまうことが分析結果から得られている。それに対応するため各学科・課程で「難関科目」を抽出し、単位の細分化・補充授業の設定・後追い履修等の対策を講じた結果、2023 年

度は 95%以上となる進級率が増加した。しかし 2024 年度は再び低下傾向になった。

- ・優秀な学生への高度な学びの対応では、上位学年の授業科目を先取り履修できる仕組みを構築した。先取り履修は成績上位者に多く、制度の有効性を確認した。
- ・あらたに資格取得者への単位認定制度を 2025 年度より開始する。工業高校出身で電気系資格(電気工事士等)を取得済の学生には単位認定を実施する。これにより 1 年次の時間が空き、先取り履修や教養科目の幅広い学修が可能になる。
- ・また、早期卒業・早期修了制度として、3.5 年で学部卒業+1.5 年で修士修了の計 5 年で修士学位取得を可能とする制度を整備する。英語要件を撤廃し、成績基準による運用へ変更する。大学院特待生の事前確約制度も導入したが、就職内定の早期化により効果は限定的である。
- ・多様な幅広い志向への対応として、各学科・課程においてディプロマポリシーを担保しつつ必修科目を精査、削減し、リベラルアーツ系科目を配置し、「より広く」も「より深く」も学生の志向に合わせた学びの選択の自由度を可能にした。リベラルアーツ系科目の開講・履修者数が増加し、他学科履修も増え、学生の学びの多様化が進展した。国際教育理工学課程では、開始当初は履修者が少なかったが、徐々に人気科目が増加しつつある。
- ・これから求められる教育の強化では、数理・データサイエンス・AI への関心を高め、適切に理解し、知識および技術の体系的な学びによって、これらの基礎的な能力の向上を目指した KIT 数理データサイエンス教育プログラムを全学で運用し、AI 解析など実践的な授業を継続している。PDIII(卒業研究)にもデータサイエンスを導入する方針が学長より示されている。
- ・2025 年度より全学必修「イノベーション基礎」を 3 年次に開講する。SRI 方式のワークショップを導入し、教員ファシリテーターを養成している。
- ・本学の良い部分を堅持&進化では、自治体との課題解決型授業を継続し、DX の手法を取り入れたプロジェクトも実施していく。

改革の枠組みだけではなく、教育の質は「各教員の熱意」と「職員の支援」が鍵であると思っている。

5. 金沢工業大学における教育 DX の取組について（山本 知仁 DX 推進委員長）

金沢工業大学における教育 DX の取組について、【資料4】に基づき、山本 DX 推進委員長より以下の通り説明がなされた。

- ・本学の教育 DX の取り組みについて、DX 推進委員会は 2020 年のコロナ禍を契機に設置され、その後文部科学省の「プラス DX」支援を受けて組織が本格化した。2020～2022 年度を第 1 期、2023～2025 年度を第 2 期として取り組みを継続している。
- ・教育 DX の中心となる 3 つの柱として、第一に、大学内に蓄積された膨大な学修ビッグデータを解析し、その結果を基に学生の学修支援に取り組んでいる。毎日更新される学習ログを分析し、教員だけでなく AI も活用して学修上の課題を自動検出し、科目ごとに支援につなげている。
- ・課外活動と学修行動の関係では、課外活動に参加している学生は、活動をしていない学生に比べてレポートを早めに提出する傾向があり、特に活動を 2 つ行っている学生が最も余裕をもって提出している。また、情報工学科のデータでは、課外活動が多い学生ほど卒業後に上場企業へ就職する割合が高く、平均年収も高い傾向が確認できてい

る。これは単に授業を受けるだけでなく、主体的に活動し、セルフマネジメント能力を高めている学生が企業から評価されていることを示すものであると考える。

- ・退学リスク予測 AI の取り組みについて、学期終了時点で学生が退学に至る可能性を予測する AI モデルを開発し、2 年半以上運用してきた。初期のモデルでは高い精度を示し、その結果に基づいて理由を特定し、学内 LMS(自己成長システム)を通じて自動的に学生へフィードバックを送っている。こうした取り組みにより、2022 年度には退学者数が減少する効果が見られたと感じている。しかし、学期途中で体調や環境が変化して退学リスクが高まる学生は予測が難しいため、最近では LMS のログインデータを活用し、学期途中の段階で異変を察知する「早期アラートモデル」を構築した。来年度から運用を開始したいと考えている。
- ・学生面談業務に対しても AI 技術を導入している。1 クラス 70～80 名の学生と面談し、1 人 10～15 分を要するため、教員の負担は大きい。これを少しでも軽減するため、スマートフォン上で動作する AI 面談システムを開発している。
- ・アダプティブラーニングについて、学生の回答結果に応じて弱点を分析し、即座に復習教材を提示する。教員側もリアルタイムで理解度を把握できるため、授業設計に反映しやすい。
- ・VR/AR を活用した学習環境の整備について、大学内ではヘッドマウントディスプレイ(HMD)を貸し出す拠点を学生が運営しており、学生が自ら機材管理やコンテンツ制作・指導を行っている。大人より学生の方が機器扱いに慣れており、アイデアも豊富であるため、学生が主体となる運営が非常に有効と感じている。
- ・DX ハイスクール支援について、高校のデジタル化が十分に進んでいない現状を踏まえ、高校教員を対象とした研修会を開催した。探究学習での ICT 活用、プロンプトエンジニアリング、プログラミング体験などを提供し、本学の教育方針や学びの価値を広く伝える機会となっている。今後は協定校の拡大を進め、高校教育の支援と大学への進学者確保の双方に寄与したいと考えている。

今後もデータ解析、AI を用いた教育支援、VR/AR の活用、地域連携を進め、教育の質向上と社会貢献を推し進めていく方針である。

6. 取組み評価について

各外部評価委員の方々から以下のご意見をいただいた。

(公立千歳科学技術大学)小松川 浩 様からのご意見

- ・「情報に強い」をキーワードに、「創造的探究」を教育目標にして、「文系・理系の枠を超えた社会実装型総合大学」を目指す貴学の取り組みは、壮大な社会実験のようであり、日本の高等教育の先導的な役割として非常に重要なものと期待している。
- ・三つのポリシーに基づく大学運営をしていくうえで、学修者の主体性をどうしていくかの議論に尽きると思っている。

入学教育について

- ・入学前の段階で学ぶことのゴールを見据えながら学ぶ内容を決めていく「入学教育」の取り組みは、逆向きの設計をした教育手法であり目的化していない点が理にかなっていると思われる。特に入学後の1年間の学びに繋げようと意識して設計されている点は大変評価できる。

カリキュラムについて

- ・先取り履修や早期卒業・早期修了制度は、学修者本位の教育の観点から高く評価できる、他大学にとっても参考となる取り組みである。
- ・3 年次終了段階で大学院進学にプロモートする大学院特待生制度(事前確約)取り組みも大変高く評価できる。
- ・オンラインを積極的に取り入れた授業設計、カリキュラム設計を考慮されると良いのではないかと。高校で情報 I を扱うようになって、入学前教育をやっている他大学やベンダーから聞く印象では、今の高校3年生はオンラインにすごく慣れている生徒が増えてきている。オンラインは主体性を涵養していくことができるメリットになってきているので、オンラインを取り入れることで、学修者に選ばせるような取り組みがあると良い。
- ・カリキュラム設計では底上げが苦勞する点と共感できる。退学率については、教育 DX を推進しておられるので、全学的にオンラインを導入しどの授業もオンラインで受講できる道筋をつけ、選択肢を用意して多様な学生に対応していくような授業設計を思い切ってやった方がかえって教員の負担を軽減できるのではないかと。底上げしなければいけない学生と意識の高い学生と、一つの教室で扱うには限界が来ているのではないかとと思われる。自律的に学習できる学生、オンラインを用いる学生、対面で教員や TA の支援が必要な学生など、初等中等教育で行っている複線型授業のような取り組みも考慮しても良いのではないかとと思われる。

教育 DX について

- ・教育 DX 推進におけるアウトプット、アウトカムズについては、学力とはなにか、各教員が授業で何を教えるのかということだと思うが、学部学科を改組される今、学生にとっての求められる学力・本当に教えなければいけない内容を全学的に議論をする中で、退学者等についても議論していかれると良いのではないかとと思われる。その延長線に AI 等を使った学修支援など様々なことが出来てくると良いと感じた。

(北菱電興株式会社)酒元 一幸 様からのご意見

- ・「キャリアデザイン」の観点から、統計データで見ると、企業が学生に求めるものは主体性、協調性などの非認知能力であり、その一方、学生は技術やスキルを大事にして社会に出ていこうとする。ここに大きなギャップがあることを企業側も理解しないといけないと思っている。このギャップを埋めることを大学と企業が共に考えていく中で、学生のリアルな学びや体験を得られる社会実装型プロジェクト教育は有効であると感じている。
- ・教育の質は担保しつつ、専門家などの社会のリソースをもっと活用しても良いのではないかと感じる。社会には専門家がいて、教員の負担を過度に増やすことなく社会との繋がりも深められ、リアルな言葉を通して学生が学ぶことのできる教育を継続して取り組んでいただきたい。
- ・互いに教え合う環境は高く評価できる。一方で、ロールモデルから学べることはあくまでも具体であり、マイストーリーではないその人のストーリーをいかに抽象化して自分のものにしていくかという思考する力が重要となる。社会で仕事をしていると考える力が徹底的に求められる。そういった力が養われ学生が自分の未来を切り開いていける教育が行えると良いと思われる。

(石川県立工業高等学校)藤崎 勝治 様からのご意見

- ・教育 DX では技術的な面での指導・協力に加え、数回本校の職員が伺い勉強させていただいており、感謝している。
- ・KIT 入学教育のような取り組みは、生徒を送り出す立場からすると非常に有難く、我々も進学する前に何かすることは

ないかと考えるヒントになった。

・何がしたいのかと聞いたときに答えられない、アンケートをとると、就職する生徒にしてみれば就職目的だと言うが、どんな会社に入りたいのかは決まってないというのが現状で、入りたい会社、やりたい技術を絞らせるためには入学前から何かしなくてはいけないのかなと感じていた。本日の内容は参考になることばかりでした。

(金沢市都市政策局) 安江 一智 様からのご意見

・金沢市から貴学へ開講依頼をさせていただいた額地区の地域力創造プロジェクトではご協力に感謝している。学生と接する中で、学生は情報過多や人間関係の希薄、自己肯定感の低い学生が多いように感じる。一方で、タイムパフォーマンス重視ですぐに結果を求めたり、選択した研究が本当に良かったのか、将来役に立つのかという不安を感じながら学生生活や研究をしている学生も少なからずいるのではないかと感じている。地域の方が大変喜んでおられたように、プロジェクトでの研究・学び・実践を通して他者の喜びを知り、それが自分の喜びとなって、小さな成功体験を早い段階から積んでいくことで、その後の学ぶ意欲への正のスパイラルに繋がっていくのではないかと感じた。

・人口減少の中で金沢市も国が勧める「若者や女性に選ばれるまちづくり」を進めている。市としても学生が卒業後に市内に定着する、あるいは市の経済界のものづくりの担い手になってもらうことは、大変多くの点で望まれるため、今後、市として支持したい取り組みである。

・リベラルアーツ系科目の中の一コマであったり、特別授業としてでも、金沢市のまちづくりというテーマで、例えば市長が学生の前でお話しする機会があれば協力させていただきたいと思っている。

(株式会社北國フィナンシャルホールディングス) 横越 亜紀 様からのご意見

・教育目標を変えた点、社会課題の解決において技術者が技術者とだけ関わっているのではないとの考え、人間形成における主体性のキーワード等は、良いテーマだと思われる。KIT 入学教育の中で、入学状況において数字の上からだけでは分からないシフトチェンジが起こっているとの説明には、18 歳人口の減少という外部環境において非常に苦労が多い中で、様々な取り組みをされている点は大変評価できる。

・必修科目を精査し選択肢を多様化している点においては、文理横断のリベラルアーツ系科目は社会に出てからもじわじわと効いてくる大事な科目と捉えており評価できる。

・企業側の責任でもあるが、実質的な学生生活の期間が非常に短くなっていて、留学しようにも大学 3 年生は就職活動があるので留学できないという状況である。もちろん長期的にここで働いてほしいという気持ちをもっているが、留学を含め外の世界にチャレンジする力をもつ学生を育成していかなければいけないと思っている。早期卒業・早期修了制度の中で、英語力を問わないというのは間口を広げる意味では良いかと思われたが、社会に出てから、特にエンジニアなどには英語は役立つのではないかとと思われるので、その点を考慮いただけると良い。

・昨今の就職活動は非常に学生に有利な状況であるが、今年の学生は学生生活の半分くらいをコロナ禍で過ごしてきている世代か、昨年とは学生の層が変わってきていると感じている。最終面接の段階になっても目的意識を持てずにいる。入学した時はともかく、学生生活が 2 年 3 年過ぎても、まだ定まらないけど就職活動がスタートしてしまっているという状況を非常に問題だと感じている。本日の説明を受け、大学生活の 4 年間でこの部分を育て上げていくことが難しくなってきていて、リカレント教育など社会人になってから改めて学べる環境が大学にあることを、在学中から学生たちに意識づけていくような働きかけがあっても良いのではないかと感じた。

7. 本日の委員会を振り返って(統括) (大澤 敏 学長)

外部評価委員による評価を受け、大澤学長より以下のように総括が述べられ、閉会した。

我々がやらなければいけないことは、キャンパスの中に留まるのではなく、また、日本の教育の閉塞性の一つである同年代での学び合いを縦の繋がりに広げていくことに注力していきたいと思う。変化の激しい時代に、社会人になっても学ぶことは多いと思われる。

大学の役割は、社会の中にあって、文系・理系を問わず、かつ年代も問わず、様々な職種の人が交わる、世代・分野・文化を超えた共創を通して生涯学び続けることができる大学として本学が機能していかなければいけないと改めて感じさせていただいた。

様々なご意見を参考にさせていただきながら、本学の教育改善を行っていききたい。本日の委員会を通して、課題をいただき、気づかなかった点に気づかせていただいたことに感謝し、次回も引き続きよろしくお願いしたい。